

(1) 哺乳類

日本からはこれまで160種の哺乳類の記録があり（環境省，2014）、この中から外来種などを除いた約130種が日本在来種である。埼玉県からはこれまで外来種や迷入種を含め57種が記録されているが、このうち51種が埼玉県在来種と考えられる。

今回、埼玉県RDB動物編の改訂にあたり、これら51種を対象に生息状況を調査した結果、その約45%にあたる23種をレッドリスト掲載種とした。哺乳類の掲載種数の変遷を見ると、初版では39種（埼玉県，1996）、改訂版40種（埼玉県，2002）、前版39種（埼玉県，2008）と、これまで県産の在来哺乳類の約80%をレッドリスト掲載種としてきた。第4版となる本書では掲載種が23種と大きく減少しているが、哺乳類分野については、後述の理由により、これまで行ってきた地帯区分別のレッドランクの評価を取りやめ、全県評価のみを採用したことによる影響も大きい。

埼玉県は、東部には河川の集中する低地が広がり、西部には甲武信ヶ岳や雲取山など標高2,000m級の奥秩父山塊をはじめとする山々が連なり、その間を台地や丘陵地が南北に列をなしている。このような自然環境の多様性を反映して、県内の動植物相を総覧する内容のこれまでの刊行物では地帯区分を意識した記述が広く用いられてきた（例えば『埼玉県動物誌』，埼玉県教育委員会1978年発行）。そうした自然環境の多様性をより鮮明にするRDB作りが初版から意識され、すべての分類群で一種ごとに地帯区分別にレッドランクを評価し、それらを土台にした総合的判断として全県一区のレッドランクを評価する、という方法が採用されてきた。

これは埼玉県の地勢に適したレッドランク評価への取り組みであり、特に開発が急速に進んでいた低地帯や台地・丘陵帯における様々な動物の生息状況を示すには有効かつ重要な手法であった。

しかし、哺乳類の研究では、近年になって自動撮影カメラやラジオテレメトリーなどを導入した研究が進展し、一部の哺乳類はこれまで考えられてきた以上にその生活空間が広いことや環境適応性が柔軟であることなどが明らかになり始めた。例えば、自動撮影カメラを導入した研究によりキツネは1日に3.5km移動するという報告があり（平川・野崎，2014）、ツキノワグマではテレメトリー法を用いて雄で40km²、雌で25km²の行動圏を持つことが報告されている（上馬・山田，2008）。また、代表的な樹洞性コウモリとされるヤマコウモリや県内では秩父地方でのみ記録されていたヒナコウモリが、熊谷市内の新幹線高架橋のコンクリートブロックのすき間にコロニーを形成しているという報告も発表された（大沢ほか，2012）。

これら新たに集積された哺乳類各種に関する知見を、前版の地帯区分別評価を根拠とした全県評価に重ね合わせてみると、いくつかの種では生息状況の評価が実態に合わないと思われる点が明らかになった。このような経緯から、基本的な生活空間が広く移動力も大きな哺乳類のレッドランクは、低地帯や台地・丘陵帯でのENやVUといったランクの高い地帯区分別評価の影響を受けた全県評価ではなく、埼玉県全体を一つの生息域として評価する全県評価のみを用いることより、本県における在来哺乳類の生息状況を客観的に反映できると判断した。

以上により、今回の改訂ではレッドリスト掲載種が前版の39種から23種へと大きく減じたが、リストから外れた種の多くが、低山帯から山地帯・亜高山帯にかけて良好な生息状況が保たれている分布域があると判断できた。例えば、カヤネズミは前版では地帯区分別評価で低地帯から低山帯までNT1,2、全県評価でもNT1,2とされたが、本書でランク外となった種である。たしか

に低地帯から台地・丘陵帯にかけては土地開発や農地転用、耕作放棄などによる生息環境の悪化が見られるものの、分布の中心である低山帯などでは休耕田や荒廃地でも周辺部に生育するイネ科植物群落で巣を確認することは難しくなく、また、県北西部の山間部の田んぼ周辺やスキ群落などでも安定した生息状況を認めることができ、全県一区の評価としてはレッドリストに含める必要はない、と判断した種である。また、モモジロコウモリ（前版の全県評価でNT1）とヒナコウモリ（同VU）のように、最近になって新たに生息状況が良好なコロニーが複数発見されたことでレッドリストから外れた種もある。

埼玉県の哺乳類相に関して、前版刊行時からの大きな変化は、在来種のニホンジカとイノシシ、外来種のアライグマとハクビシンの4種の個体数の増加と分布の拡大である。

特にニホンジカについては、平成10年代には小川町、ときがわ町（旧都幾川村）、越生町などの秩父山地から丘陵部に分布を広げていることが確認され、スギ、ヒノキの苗木食害、生息密度の高まりが伺えるようになった（埼玉県，2015）。現在ではさらに周辺部に広がり、捕獲頭数が年間1,500頭前後で推移している（埼玉県，2015a）。このため、生息地の林床植生が衰退、消失し、裸地化した区域が拡大している（埼玉県，2015a）。埼玉県の主な生息地である山地帯から亜高山帯にかけても個体数の急増によって樹木の剥皮や林床植生の消失などが引き起こされており、裸地化した林床の土砂の流出や斜面崩壊などの恐れが高まっている（埼玉県，2015a）。今回の哺乳類のレッドリストの中で最も多くの種を占めるコウモリ類は森林に生息する種が多く、自然林の大規模伐採などが無い現在、その生息状況は一見、安定しているようにみえる。しかし、秩父山地におけるニホンジカの影響は大きく、剥皮による枯死木の増加や下層植生の消失などが進行すれば、ねぐらとなる樹洞やエサとなる昆虫類の減少が懸念される。また、未だ県内での生息を再確認できないチチブコウモリをはじめ、クビワコウモリやカグヤコウモリなど、近年になって生息が再確認された山地性の種でも確認個体数は少なく、秩父山地の自然林の安定した維持管理がこれらコウモリの安定的な生息にとっても重要である。ニホンジカの個体数の増加がもたらす希少な哺乳類への影響を、精査する必要があるだろう。

イノシシも同様に個体数増加と分布拡大の結果、現在では丘陵帯に接する平野部にまで生息している（埼玉県，2015b）。イノシシの希少哺乳類への影響は定かでは無いが、留意する必要があると思われる。

外来種のアライグマとハクビシンも埼玉県における分布拡大が顕著である。ハクビシンは、現在では秩父市大滝や小鹿野町両神などの山間部にまで広く分布しており（小鹿野町，2008；秩父市，2016）、その捕食が希少生物への脅威となる可能性がある。アライグマが山間部へ侵入するのも時間の問題であり、既に高密度で生息している県中央部では（埼玉県，2011）、トウキョウサンショウウオやサワガニなど希少生物への捕食影響も危惧される。NT1であるムササビはスギやケヤキなどの大木の樹洞をねぐらとし、山際には人家にも侵入して天井裏にスギの皮や枝を集めて巣を作るため（斉藤ほか，1987）、同じく大木の樹洞や人家にも棲みつくハクビシン、アライグマ（環境省，2014）との競合により、ムササビの生息に影響を与えている可能性が考えられ、今後これら外来哺乳類と在来動物種との関係性にも注目していく必要がある。

[付記] 次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、阿部（2005）、今泉（1960）、Yoshiyuki（1989）および環境省（2014）を参照した。

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 食肉目イヌ科
埼玉県(2018) EX 環境省(2014) EX

〔和名〕 **オオカミ**

〔学名〕 *Canis lupus* (Linnaeus)
指定状況 -

【形態】 頭胴長 95 ~ 129cm。北海道に産したエゾオオカミと本州のニホンオオカミでは大きさが異なる。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 本州では 1905 年の奈良県での記録を最後に絶滅した。

【県内での生息状況】 秩父地方を中心に頭骨などの記録がある（直良・小林, 1960）。また、三峯山博物館（秩父市）にはニホンオオカミのものとされる毛皮が保存されている。

【特記事項】

〔目名・科名〕 食肉目イタチ科
埼玉県(2018) EX 環境省(2014) EX

〔和名〕 **カワウソ**

〔学名〕 *Lutra lutra* (Linnaeus)
指定状況 国指定特別天然記念物

【形態】 頭胴長 70cm 前後、尾長 46cm 前後。四肢の指の間に水かきがある。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州

【主な生息環境】 日本各地の河川の中下流域から沿岸部に生息していたが、高知県の記録を最後に絶滅したと推定される。

【県内での生息状況】 県内に生息していた確実な記録はない。

【特記事項】

〔目名・科名〕 コウモリ目ヒナコウモリ科
埼玉県(2018) EX 環境省(2014) -

〔和名〕 **ユビナガコウモリ**

〔学名〕 *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson)
指定状況 -

【形態】 前腕長 45 ~ 51mm。体重 10 ~ 17g。体毛は茶褐色から黒褐色。狭長型の翼を持つ。

【国内分布】 本州、四国、九州

【主な生息環境】 主な生息地は海食洞や鍾乳洞、水路トンネルなどの洞穴である。数百から数千を超える大群を形成する。わが国では海に近い洞穴で大きな集団が見られ、山の中の集団は例が少ない。

【県内での生息状況】 明治年間に波江（1989）による報告があるが、それ以外の記録がない。本県ではすでに絶滅したと考えられる。

【特記事項】

〔目名・科名〕 コウモリ目ヒナコウモリ科
埼玉県(2018) EN 環境省(2014) -

〔和名〕 **カグヤコウモリ**

〔学名〕 *Myotis frater* Allen
指定状況 -

【形態】 前腕長 40mm 前後。体重 5.5 ~ 11g。体毛は褐色、腿間膜が広く、後足が大きい。

【国内分布】 北海道、本州

【主な生息環境】 森林内の樹洞を主なねぐらとするが家屋内や洞穴での繁殖も知られている。本州中部では主に山地帯から亜高山帯に生息する。

【県内での生息状況】 秩父市大滝川又の発電所付近の記録がある（鈴木, 1978）。近年、大滝栃本周辺で 2 個体が確認された。この 2 個体はミズナラ、コナラを主とした自然林内で活動していた（町田, 未発表）。

【特記事項】

【目名・科名】	コウモリ目ヒナコウモリ科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2014)	VU
【和名】	モリアブラコウモリ				
【学名】	<i>Pipistrellus endoi</i> Imaizumi	指定状況	-		
【形態】	前腕長 32～34mm。体重 5～9g。体毛は黄褐色。アブラコウモリに似るが、上顎犬歯の形態が異なる。				
【国内分布】	本州、四国 日本固有種				
【主な生息環境】	森林内の樹洞を主なねぐらとしているが、杉の樹皮下でも記録されている。東京都の秋川溪谷では春にアブラコウモリと一緒に採餌しているところが観察されている。森林周辺で主に活動していると考えられる。				
【県内での生息状況】	県内では 1960 年前後に小鹿野町三田川、長若で記録がある（今泉, 1960）。2004 年に秩父市大滝本周辺の自然林で 1 頭が捕獲され県内での生息が確認された（町田, 未発表）が、個体数は非常に少ないと考えられる。				
【特記事項】					

【目名・科名】	コウモリ目ヒナコウモリ科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2014)	VU
【和名】	クビワコウモリ				
【学名】	<i>Eptesicus japonensis</i> Imaizumi	指定状況	-		
【形態】	前腕長 38～43mm。体重 8～13g。体毛は褐色で首の周りに金属光沢の毛がみられる。				
【国内分布】	本州 日本固有種				
【主な生息環境】	山地帯以上の森林に生息する。樹洞を主なねぐらとすると考えられるが、長野県乗鞍高原の建物では繁殖しているのが確認されている。				
【県内での生息状況】	大滝中津川（Yoshiyuki, 1989）、奥秩父の旧十文小屋周辺で記録がある（町田ほか, 1975）。2005 年と 2016 年に秩父市大滝の山小屋周辺で当歳獣が捕獲されたことから、その周辺で繁殖している可能性がある（町田, 未発表）。				
【特記事項】					

【目名・科名】	コウモリ目ヒナコウモリ科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2014)	LP
【和名】	チチブコウモリ				
【学名】	<i>Barbastella leucomelas</i> (Cretzschmar)	指定状況	-		
【形態】	前腕長 39～44mm。体重 10g 前後。黒褐色で背中に白っぽい毛が混ざる。耳介が三角形をしている。				
【国内分布】	北海道、本州、四国				
【主な生息環境】	主に森林内の樹洞をねぐらとしているが、冬には洞窟、家屋、岩の隙間、トンネルなどでも発見されている。				
【県内での生息状況】	わが国では 1883 年に秩父で最初に記録されたことから和名にチチブがつけられた（波江, 1989）。冬眠期に秩父市内の家屋、秩父市大滝の洞窟壁面の隙間（吉行・鈴木, 1970）及び洞窟内での記録がある（斎藤ほか, 1976）。しかし、それ以降の記録がなく、絶滅が心配される。				
【特記事項】					

【目名・科名】	コウモリ目ヒナコウモリ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	VU
【和名】	ヤマコウモリ				
【学名】	<i>Nyctalus aviator</i> Thomas	指定状況	-		
【形態】	前腕長 57～66mm。体重 35～55g。大型で翼開長 400mm に達する幅の狭い（狭長型）翼を持つ。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	主に大木の樹をねぐらとするが、鳥用巣箱、建物などもねぐらとして利用する。近年は新幹線橋脚部の隙間に生息する本種も観察されている。森林内の樹洞だけでなく、市街地の寺社、公園などにある大木の樹洞も利用している。				
【県内での生息状況】	秩父神社のケヤキの樹洞（鈴木, 1978）、深谷市川本、熊谷市などでの記録がある。近年は熊谷市内の上越新幹線の橋脚部の隙間に生息する本種が確認されている（大沢ほか, 2012）が、季節的に個体数の変動がみられる。				
【特記事項】					

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕	モグラ目トガリネズミ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
〔和名〕	カワネズミ				
〔学名〕	<i>Chimarrogale platycephala</i> (Temminck)	指定状況	-		
【形態】	頭胴長は100～130mm、尾長100mm前後、体重30～50g。大型で水中生活に適した体型をしている。				
【国内分布】	本州、九州				
【主な生息環境】	山間部の溪流を主な生息地としている。水中で水生昆虫や魚類、カエルやサワガニなどを主に捕食しており、移動も水中や岸辺の岩の下などを利用している。大きな河川より岸まで木で覆われるような溪流域で多く見られる。				
【県内での生息状況】	本県では北部、西部の河川上流部の溪流に見られるが(斎藤ほか, 1977)、砂防ダム等による行動圏の分断が心配される。道路に沿う河川においては、土砂の流入や流路変化なども生息を圧迫する要因となっている。				
【特記事項】					

〔目名・科名〕	モグラ目モグラ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	NT
〔和名〕	ミズラモグラ				
〔学名〕	<i>Euroscaptor mizura</i> (Günther)	指定状況	-		
【形態】	頭胴長100mm前後、尾長20mm前後、体重30g前後。小型のモグラで、吻上面の裸出部は長三角形。				
【国内分布】	本州				
【主な生息環境】	低山帯から高山帯までの森林に生息する。モグラのトンネル内にある排泄場所からキノコ的一种ナガエノスギタケが発生することを手掛かりに、関西地方では低標高の落葉広葉樹林でも多数発見されている(相良ほか, 2008)。				
【県内での生息状況】	埼玉県では低標高地での記録はなく、雲取山、白岩山(鈴木, 1978)、大持山、秩父市奥橋立、両神山、武甲山など、標高1,000m以上の地域に生息の中心がある(斎藤ほか, 1987)。				
【特記事項】					

〔目名・科名〕	コウモリ目キクガシラコウモリ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
〔和名〕	キクガシラコウモリ				
〔学名〕	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i> (Schreber)	指定状況	-		
【形態】	前腕長60mm前後の大型のコウモリ。体毛は薄い褐色で幅の広い(広短型)翼を持つ。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	主に洞穴に生息するが、家屋内での生息例も知られる。洞穴内では単独あるいは集団を形成する。冬眠、出産子育てなどの時期によって最適な洞穴を選択している。				
【県内での生息状況】	主に洞穴で確認されており、亜高山帯の赤沢岳十字鍾乳洞から秩父市、小鹿野町、横瀬町、皆野町、長瀨町、飯能市、小川町古寺鍾乳洞、熊谷市などの記録がある(鈴木, 1978)。県内では大きな集団は見られず、いずれの生息地も確認された個体は数頭どまりである。				
【特記事項】					

〔目名・科名〕	コウモリ目キクガシラコウモリ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
〔和名〕	コキクガシラコウモリ				
〔学名〕	<i>Rhinolophus cornutus</i> Temminck	指定状況	-		
【形態】	前腕長40mm前後。キクガシラコウモリに似るが翼開長25cm程で小さい。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	主に洞穴に生息するが、家屋内での生息例も知られる。洞穴内では大きな集団を形成することが知られている。冬眠、出産子育てなどの時期によって最適な洞穴を選択している。				
【県内での生息状況】	主に洞穴で見られ、秩父市、小鹿野町、横瀬町、皆野町、長瀨町、飯能市、日高市などの記録がある(鈴木, 1978)。県内の洞穴では秩父市大滝の生息地で時々100頭ほどの集団が見られる他は大きな集団はほとんど見られず、単独か少数個体で生息する(町田, 未発表)。				
【特記事項】					

〔目名・科名〕	コウモリ目ヒナコウモリ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
〔和名〕	ヒメホオヒゲコウモリ				
〔学名〕	<i>Myotis ikonnikovi</i> Ognev	指定状況	-		
〔形態〕	前腕長 35mm 前後。頭胴長 45～50mm。体毛は褐色で背には金属光沢の毛がある。小型の種。				
〔国内分布〕	北海道、本州				
〔主な生息環境〕	森林を主な生息地とし、樹洞や樹皮下などをねぐらとするが家屋での生息も知られている。本州では山地帯以上に生息する。				
〔県内での生息状況〕	県内では山地帯から亜高山帯にかけて生息しており、秩父山地の旧十文字小屋周辺（町田ほか、1975）、秩父市大滝栃本付近の自然林などで記録されている（町田、未発表）。栃本周辺のミズナラ、コナラを主とした森林内では夏季には普通に見られる。				
〔特記事項〕	研究者により、北海道産をエゾホオヒゲコウモリ、本州東北地方と富士山産をフジホオヒゲコウモリ、長野県産をシナノホオヒゲコウモリ、尾瀬産をオゼホオヒゲコウモリとする説もある。				

〔目名・科名〕	コウモリ目ヒナコウモリ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
〔和名〕	ウサギコウモリ				
〔学名〕	<i>Plecotus auritus</i> (Linnaeus)	指定状況	-		
〔形態〕	前腕長 40～45mm。体重 7～13g。体毛は薄い黄褐色。耳介が非常に長く特徴的。				
〔国内分布〕	北海道、本州、四国				
〔主な生息環境〕	森林内の樹洞や鍾乳洞や採掘坑などの洞穴、家屋内にも生息する。翼が広短型で込み入った林内を飛翔し、ホバリングもできる。地上に降りて採餌も行うと考えられる。				
〔県内での生息状況〕	秩父市大滝、浦山、尾田蒔などで記録がある（鈴木、1978）。秩父地域では鍾乳洞、採掘坑、トンネルなどでみられることが多いが、活動期には秩父市大滝栃本周辺の自然林内でもみられる。				
〔特記事項〕					

〔目名・科名〕	コウモリ目ヒナコウモリ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
〔和名〕	テングコウモリ				
〔学名〕	<i>Murina hilgendorfi</i> (Peters)	指定状況	-		
〔形態〕	前腕長 41～46mm。体重 9～15g。体毛は灰褐色で、銀色の刺毛がある。鼻先が管状になり突出する。				
〔国内分布〕	北海道、本州、四国、九州 日本固有種				
〔主な生息環境〕	森林内の樹洞を主なねぐらとしているが、洞穴にもよく見られ冬眠も行っている。森林内で採餌するが、広短型の翼を持っているためゆっくりと飛翔する。林内の低層を飛翔し、地上にも降りて捕食する。				
〔県内での生息状況〕	秩父市、小鹿野町、日高町、小川町、東秩父村などで記録がある（鈴木、1978）。鍾乳洞や人工トンネルでも見られる。秩父市大滝栃本付近では自然林の低層を飛ぶ本種が捕獲されている。				
〔特記事項〕					

〔目名・科名〕	コウモリ目ヒナコウモリ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
〔和名〕	コテングコウモリ				
〔学名〕	<i>Murina ussuriensis</i> Ognev	指定状況	-		
〔形態〕	前腕長 29～33mm。体重 3.5～6g。体毛は黄土色。鼻先が管状になり突出する。				
〔国内分布〕	北海道、本州、四国、九州				
〔主な生息環境〕	低山帯から亜高山帯まで広く生息している。ねぐらは樹洞、洞穴、家屋、木の茂み、落葉の下、樹皮の下など多様である。樹間や葉の上の昆虫類を捕食する。広短型の翼でゆっくりと飛翔し、地上の昆虫類も捕食している。				
〔県内での生息状況〕	秩父市内の田村、別所、浦山、白岩山、大滝大輪、大滝栃本の記録がある（鈴木、1978）。秩父市三峰の洞窟では岩の隙間で発見されている。大滝栃本周辺の森林では活動期によくみられる（町田、未発表）。				
〔特記事項〕					

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 齧歯目リス科
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -
 〔和名〕 **ニホンモモンガ**
 〔学名〕 *Pteromys momonga* Temminck
 指定状況 -

【形態】 頭胴長 14～20cm、尾長 10～14cm。前後肢間に飛膜があり滑空できる。
 【国内分布】 本州、四国、九州 日本固有種
 【主な生息環境】 山地帯から亜高山帯の森林に生息する。樹洞や樹木の股にスギなどの皮を細かく裂いて球形の巣を作る。山小屋の屋根裏や板壁の中に巣を作ることも知られている。
 【県内での生息状況】 県内では越生町や旧神泉村などの記録があるが、主な生息地は秩父地域を中心とした山地帯から亜高山帯である（鈴木，1978）。樹洞や山間部の家屋の天井、板壁の間、鳥の巣箱などに巣を作る。
 【特記事項】

〔目名・科名〕 齧歯目リス科
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -
 〔和名〕 **ムササビ**
 〔学名〕 *Petaurista leucogenys* (Temminck)
 指定状況 -

【形態】 頭胴長 34～48cm、尾長 28～41cm。飛膜が首から四肢、尾の間に発達し滑空できる。
 【国内分布】 本州、四国、九州 日本固有種
 【主な生息環境】 低地から亜高山帯まで生息する。大木の樹洞のほか家屋内にも入り込み、枝やスギの樹皮などを裂いた巣を作る。木々を滑空し樹上で主に木の芽、葉、花、果実などを食べる。地上に降りることはほとんどなく、大木の減少が生息域の減少につながっている。
 【県内での生息状況】 県内では亜高山帯から比企丘陵、加治丘陵などの山裾まで分布している（鈴木，1978）。丘陵帯では寺社の大木の樹洞や建物に住むが、ハクビシンやアライグマの増加によりそれらの種とすみかの競合が起こり、安定的な生息が脅かされていることが懸念される。
 【特記事項】

〔目名・科名〕 齧歯目ヤマネ科
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -
 〔和名〕 **ヤマネ**
 〔学名〕 *Glirulus japonicus* (Schinz)
 指定状況 国指定天然記念物

【形態】 頭胴長 68～84mm、尾長 44～54mm。体毛は淡褐色で背中に黒い縦線が1本あり、尾も黒い。
 【国内分布】 本州、四国、九州 日本固有種
 【主な生息環境】 低山帯から亜高山帯の森林に生息する。樹洞にコケや樹皮を集めて巣を作り、活動期には鳥の巣箱も利用する。冬眠をするため、冬眠前の体重は活動時の倍ほどになる。山小屋の布団の中、枯れ木や雪の中から発見された例もある。
 【県内での生息状況】 県内では亜高山帯から丘陵帯まで生息する。秩父山地の山小屋ではよく見かけられる。秩父市、小鹿野町、皆野町、横瀬町、飯能市などで記録がある（鈴木，1978）。
 【特記事項】

〔目名・科名〕 食肉目イタチ科
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) NT
 〔和名〕 **オコジョ**
 〔学名〕 *Mustela erminea* (Linnaeus)
 指定状況 -

【形態】 雌雄で大きさが異なる（雄>雌）。頭胴長 18cm。夏毛は褐色、冬毛は白色で尾は一年を通じて黒色。
 【国内分布】 北海道、本州
 【主な生息環境】 本州では山地帯から高山帯まで広く生息している。夏は高山帯の岩場などにも出現する。ネズミや鳥類、昆虫類など、小動物を食べる。
 【県内での生息状況】 秩父山地の亜高山帯を中心に生息し、冬にかけては山地帯下部で見られることもできる。秩父市大滝、小鹿野町などで記録がある（鈴木，1978）。奥秩父の雲取山、笠取山、甲武信ヶ岳などでは山小屋や登山道で目撃されている。
 【特記事項】

【目名・科名】	食肉目クマ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
【和名】	ツキノワグマ				
【学名】	<i>Ursus thibetanus</i> (Cuvier)	指定状況	-		
【形態】	頭胴長 120 ~ 145cm。体重 70 ~ 120kg。黒色で胸に白い三日月模様が見られる。				
【国内分布】	本州、四国、九州				
【主な生息環境】	本州では冷温帯落葉広葉樹林を中心に生息する。木の芽や草本類、昆虫類、木の実を主に食べ、哺乳類の死体を食べることもある。ブナ、ミズナラ、クリなどの実を食べるために登って枝を折るため、登った木には円座（熊棚）が残る。				
【県内での生息状況】	秩父地域を中心に県西部の飯能市、日高市、入間市、嵐山町、北部の寄居町などで記録がある。近年は山間部だけでなく、山沿いに市街地近くまで進出して住民に遭遇する事件も発生している。定住する個体は多くないとの情報もある。				
【特記事項】					

【目名・科名】	モグラ目トガリネズミ科	埼玉県(2018)	DD	環境省(2014)	NT
【和名】	アズミトガリネズミ				
【学名】	<i>Sorex hosonoi</i> Imaizumi	指定状況	-		
【形態】	頭胴長 50 ~ 66mm、尾長 50mm、体重 4.5g 前後。体毛は背面が暗褐色、腹面はそれより淡く二色性。				
【国内分布】	本州（関東地方・中部地方の山岳地帯） 日本固有種				
【主な生息環境】	亜高山帯の針葉樹林から高山帯にかけて主に生息する。近縁のシントウトガリネズミ <i>S. shinto</i> より高標高域に生息する。群馬県大峯山、北アルプス中・南部、木曾山脈、赤石山脈、奥秩父、志賀山などから知られている。主に亜高山帯から高山帯の森林や草原などに生息するが生態は不明の点が多い。				
【県内での生息状況】	県内では甲武信ヶ岳での記録がある（鈴木，1978）。そのほか秩父山地の金峰山、国師岳での記録がある（今泉，1960）。しかし、近年は本県での情報は得られておらず、生息の実態は不明である。秩父山地では標高 2,500m 以上の高山帯が主な生息域と推定される。				
【特記事項】					

【目名・科名】	コウモリ目オヒキコウモリ科	埼玉県(2018)	DD	環境省(2014)	VU
【和名】	オヒキコウモリ				
【学名】	<i>Tadarida insignis</i> (Blyth)	指定状況	-		
【形態】	前腕長 57 ~ 65mm。狭長型の翼を持ち高速飛翔する。耳介は大きく尾は腿間膜より長く突出する。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州				
【主な生息環境】	これまでわが国では 10 頭程しか記録がなく、本種の飛翔力の強さなどから長らく偶産種として考えられてきた。しかし、近年、宮崎県や高知県の離島、広島市内の高等学校の校舎などで繁殖が確認され、生息が明らかとなった。				
【県内での生息状況】	県内では秩父市内の秩父鉄道御花畑駅内の記録が唯一あるに過ぎない（Yoshiyuki, 1983）。本種は飛翔力が強く偶産の可能性も高い。生息の実態は不明である。				
【特記事項】					

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物